

平成10年度東京商船大学新入生の英語力と、これに対応した新しい入試及び英語カリキュラムの提案：購読英語クラス分け試験の結果に基づいて

著者	高木 直之
雑誌名	東京商船大学研究報告．人文科学
巻	49
ページ	1-14
発行年	1998
URL	http://id.nii.ac.jp/1342/00000584/

平成10年度東京商船大学新入生の英語力と、これに対応した新しい入試 及び英語カリキュラムの提案

— 講読英語クラス分け試験の結果に基づいて —

高 木 直 之

ENGLISH PROFICIENCY OF 1998 TUMM FRESHMEN AND SUGGESTIONS FOR A NEW ENTRANCE EXAMINATION POLICY AND ENGLISH CURRICULUM: BASED ON THE RESULTS OF AN ENGLISH SCREENING TEST

Naoyuki Takagi

Abstract

Reported in this paper are the results of the English screening test administered to the Tokyo University of Mercantile Marine freshmen of 1998. Based on the results, a new entrance examination policy and a more efficient English curriculum are proposed.

1. 緒言

本論の目的は、平成10年度新1年生を対象に行われた講読英語のクラス分け試験の結果をまとめ、学内の教官に本学新入生の英語力を把握してもらうと共に、その結果に基づいて、現状に即した入試システム及び英語カリキュラムの確立を提言することにある。次節では試験実施の方法・及びその狙いについて略述し、続く第3節において個々の設問に対する学生の解答に対して検討を加え、第4節において学生全体の成績をまとめ、最終の第5節では、以上の結果を踏まえた入試制度、及び新しい英語カリキュラムの提案を行なう。

2. 講読クラス分け試験

本学学生の英語力には大きなばらつきがあり、これに対処すべく講読英語では英語が不得意な者を集めて特別の授業をしている。1年次の講読英語は2課程の学生を4人の教官が担当するため、その内の1名がこの特別クラスを担当し、他の授業に比べて基礎的な事項の習得に目標を置き、原則として優はつけないことになっている。この特別授業への参加は学生の自由意志にまかされて来たが、これでは本当に実力の無い者がこの特別クラスに参加せず、逆に十分な力を備えた者が、優はなくとも単位が欲しいという理由で受講してしまうという不都合があった。そこで講読英語受講希望者全員にクラス分け試験を実施し、その結果に基づいて特別クラスへの参加を強く勧告することとなった。「強く勧告する」としたのは、特別クラスでは優がつかないため、クラス分け試験の結果によって強制的にこのクラスに割振ることは、優を取得する機会を入学時の実力によって奪うことになるとの意見があったためである。

クラス分け試験の問題は、平成9年度後期の筆者の教える口語英語の期末試験問題を、ほぼそのまま出題した。解答はマーク・シート方式で、口語英語期末試験時と同様、辞書・参考書等何を見ても構わない形式で行ない、受験者には前もってこの事を知らせておいた。中には辞書も参考書も持たずに試験に臨んだ者もいたようだが、その正確な数は把握できなかったものの、それほど多数ではなかった。問題は英文法の基礎的な知識の運用

能力を試すもので、辞書・参考書等を使いこなせれば、確実に正解にたどり着けるはずのものである。この試験ができないということはすなわち、どこを見れば答えがわかるかもわからないことを意味している。出題数は50問、内40問が4つの選択肢、残りの10問が、5つの選択肢の中から解答を選ぶ問題で、まったくランダムに解答した場合の得点の期待値は12点である。

新入生の英語力に焦点を当てるため、本論では Mn 48, Me 48, I 46, El 55 の計197名の新入生のデータのみを分析することとした。

3. 問題の狙いと学生の解答パターンの分析

以下に各設問をそのまま記載し、出題の狙い、及び学生の解答パターンを詳述する。スペースはかかるが、実際の問題を見なければ、学生の実力の正確な把握は困難であると考え、掲載に踏み切った。

3. 1 設問1

与えられた日本語に対する英語に誤りがあれば、その部分の記号を、無ければdを選びなさい。

誤りは一つの文につき一つ以上はありません。{これは出題のミスで、「二つ以上はない」とするべきもの}

- 1 先生は解答用紙を取り出して、学生達に配った。

The teacher ^(a)took out answer sheets and ^(b)handed out them ^(c)to the students.

- 2 彼は私に良い知らせがあると言ったが、たいしたことではなかった。

He said ^(a)he had a good news ^(b)for me, but it wasn't ^(c)that good.

- 3 あなたはいつ宿題を提出したのですか。

When ^(a)did you ^(b)turn in ^(c)your homework?

- 4 学生が一生懸命勉強したので、私は喜んでいる。(とお願いだから私に言わせて)

^(a)I am pleasing ^(b)since my students ^(c)studied very hard.

- 5 英語は私が興味を持っている課目なので、3つの英語の授業をとっている。

^(a)I'm taking three English classes ^(b)since English is a subject ^(c)that I'm interested.

- 6 日本に戻る前に1ヶ月ほどアメリカを車で横断して楽しんだ。

I enjoyed ^(a)driving across the States ^(b)for about a month ^(c)before I came back to Japan.

- 7 それが彼女があんなに楽しそうに見えた理由だとは知りませんでした。

^(a)I didn't know ^(b)that was why ^(c)she appeared so happily.

- 8 手紙の中で彼はあなたの名前に言及し、誉めちぎっていました。

^(a)He mentioned to your name ^(b)in his letter and ^(c)praised you highly.

- 9 彼は私に3年前にジョンに会ったことを覚えているか尋ねた。

^(a)He asked me if ^(b)I remembered to meet John ^(c)three years before.

- 10 トムは死んだ父親によく似ていて、私に彼と共に過ごした日々を思い出させる。

^(a)Tom resembles his father and ^(b)reminds me the days ^(c)I spent with him.

この問題は学生に受験を勧めている TOEIC の文法問題の形式に類似したもので (TOEIC では4つの選択肢の中から1つの間違いを選ばせる)、口語英語の試験で TOEIC にも備えさせる、一石二鳥の効果をねらったものである。出題のポイントは名詞の可算不可算、冠詞の用法、動詞型などで、一部をのぞけば、辞書をひいて正解にたどりつけるはずである。以下に各選択肢を選んだ学生の割合をパーセントで示し (20, 30, 20, 30はaが

30%, bが20%, cが20%, dが30%を意味し、下線を施したものが正解), 考察を加えて行く。

1. (20, 30, 20, 30) hand out は他動詞＋副詞の句動詞で、代名詞を目的語とする際には hand them out という語順になる。この情報を辞書から得ることは多少困難で、正答率30%と低かった。
2. (17, 18, 52, 14) news は不可算名詞なので、不定冠詞の a を用いることはできない。52%の学生が c の that good を選んだことは、副詞として働き、「そんなに、あんなに」を意味する that の用法を知らず、また辞書を引いてこの語義を見つけられないことを示している。news を辞書で見れば、少なくとも a のついた例文はないはずだし、辞書のなかには「1つ2つと数える時には a piece of news のように言う」と注をつけているものも多い。にもかかわらず正答率が17%と低いことは、普段まったく冠詞になど注意を払っていない証拠である。
3. (5, 29, 1, 65) さすがに半数以上が正解にたどりついたが、辞書を見れば必ず載っている turn in を選んだ者が約30%いたことは驚きである。
4. (46, 30, 6, 18) 「人を喜ばせる」の意味の他動詞 please から派生した現在分詞の pleasing は「人を喜ばせるような」という意味になり、自分が喜んでいる場合には I'm pleased. のように過去分詞を使わなくてはならない。辞書で pleasing と pleased を見てその記述を比べれば、解答は一目瞭然のはずである。30%の学生が理由を表す接続詞 since の入った b を選んでいるが、since にこのような意味があることをそもそも知らずに、この選択肢を選んだ者も多かったのではなかろうか。
5. (18, 27, 37, 18) I'm interested in a subject. は正しいが、I'm interested a subject. とは言えない。従って、「私が興味を持っている科目」と関係代名詞 that を使って言う場合にも a subject that I'm interested in のように最後の in を抜かすことはできない。これは辞書を見ただけでは正解にたどりつけないかもしれないが、関係代名詞の用法の基本である。
6. (11, 17, 32, 40) この文は正しく、間違いはどこにもない。
7. (0, 43, 23, 35) さすがに a と答えた者はいなかった。正解は c で、一般に補語に副詞が使われることはなく、「幸せそうに見えた」と言いたいなら、she appeared so happy と言わねばならない。このままでは、「彼女があんなに幸せそうに姿を現わした」を意味してしまう。43%の学生が b を選んでいるが、これは日本語の「それが」に that が対応しているためか。ちなみに英語の that に日本語の「あれ」及び「それ」の両方が対応することは、どんな辞書にもものっているはず。
8. (35, 11, 20, 34) 日本語では「～に言及する」と言うが英語の mention は他動詞で、mentioned to your name ではなく mentioned your name が正しい。これも辞書で mention をひきさえすればたちどころにわかるはずである。正答率35%はあまりに低い。
9. (11, 51, 23, 14) remember が to 不定詞を伴えばこれから先のことを覚えておき、動名詞を伴えばすでに起きたことを覚えていることを表すのは、この動詞を辞書で見ただけで明らかである。正答率ちょうど半数。
10. (14, 38, 17, 32) remind A of B が「A に B を思い出させる」を意味することは、この語を辞書で見さえすれば必ず載っている。その of が抜けていることにさえ気が付けば正解できるはず。辞書を見るまでもなくこれくらいのことは覚えていてほしいと考えるのは英語教師の高望みか。

出題形式のいやらしさも手伝ってか、全体の平均は10題中3.8点、最低は0点、最高は8点だった。以下に各得点別の度数を示す。

得点	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
度数	1	13	33	40	44	33	23	9	1	0	0

3. 2 設問 2

与えられた日本語の意味になるように括弧の中から適当なものを選びなさい。

- 11 我々は彼の才能がおどろくべきものと思った。
We found his talent [(a)astound (b)to astound (c)astounding (d)astounded].
- 12 待っている間にこのコートをプレスしてもらえますか。
Can I have this coat [(a)press (b)to press (c)pressing (d)pressed] while I wait?
- 13 メアリーにその新しい仕事をやらせてみようじゃないか。
Let's get Mary [(a)work (b)to work (c)works (d)worked] on the new project.
- 14 私はわくわくドキドキしている。
I am [(a)excite (b)to excite (c)exciting (d)excited] !
- 15 彼は私達に英語を一生懸命勉強しろと言った。
He told us [(a)study (b)to study (c)studying (d)studied] English hard.
- 16 私はその試験を院生に採点させた。
I had the exam [(a)grade (b)to grade (c)grading (d)graded] by a grad student.
- 17 彼の発明は彼の名前を皆の知るところにした。
His discovery made his name [(a)know (b)to know (c)knowing (d)known] to everyone.
- 18 私は学生に英語を一生懸命勉強させた。
I made my students [(a)study (b)to study (c)studying (d)studied] English hard.
- 19 私は自分の心臓がドキドキと早鐘のように打ち続けるのを感じた。
I felt my heart [(a)beats (b)to beat (c)beating (d)beaten] fast.
- 20 我々は時間を守るよう求められている。
We are required [(a)be (b)to be (c)being (d)been] punctual.

設問 2 の出題の狙いは、使役動詞や知覚動詞のように SVOC の補語の部分に準動詞と呼ばれる原形不定詞、to 不定詞、現在分詞、過去分詞などが入る場合に、動詞と目的語と準動詞の意味の関係にあわせて正しい選択が出来るか否か、及び他動詞から派生した現在分詞・過去分詞が正確に使い分けられるかを知ることにある。

11. (17, 21, 29, 33) 5 文型(SVOC)で使われた find で、補語には普通形容詞・もしくはそれに相当する現在分詞か過去分詞が入る。補語に原形不定詞が入ることはなく、to 不定詞は普通 be 動詞を伴う場合であるから a と b は不可。残った 2 つのうち、彼の才能は人を驚かせるものであるから、当然 astounding。astounded では「(人が)驚いている」という意味で不自然。astounded を見出しとして載せていない辞書も多いが、astounding の方はほとんどの学習辞書に載っている。d を選んだ者の方が多かったのは shocking。
12. (16, 10, 11, 63) 使役動詞 have の用法で、コートはプレスされる(受け身)という意味関係があるので、過去分詞の pressed が正解である。
13. (11, 70, 10, 9) 使役動詞 get の用法で、メアリーが仕事をする(能動)という意味関係があるので to 不定詞の to work が正解。
14. (1, 1, 33, 66) 11 と同様に他動詞 excite から派生した現在分詞と過去分詞の意味の違いが鍵。66% の学生が正解したのはよいが、30% 以上が c を選んでいるのは驚き。exciting, excited とともに辞書に載っているはずで、この 2 つを比較しさえすれば正解できるはず。

15. (9, 79, 9, 4) tell+人+to 不定詞は、中学で習う。約80%は正解。残り2割は中学英語もままならないということか。
16. (23, 5, 6, 66) 使役動詞の have で、試験は採点される(受け身)という意味関係があるので、過去分詞の graded が正解である。
17. (21, 5, 5, 69) 「OをCにする」の意味で使われた make。「みんなに知られている」は、know の過去分詞を使い known to everyone, でこれが補語になった形。21%が原形を選んだが、これは make+O+原形不定詞(Oに～させる)を覚えすぎたためか。なんとかの一つ覚え。
18. (63, 16, 7, 15) ここはまさに make+O+原形不定詞が、「Oに～させる」となる典型的な場合。正答率63%はあまりにおそまつ。
19. (14, 8, 68, 10) 知覚動詞 feel+my heart と続き、心臓が打ち続けるという能動の関係があるから、beating が正解。
20. (7, 80, 11, 3) require+O+to 不定詞の require が受け身で使われたもの。

全体の平均は6.5点、最低が2点、最高は10点だった。各得点別の度数は以下の通り。

得点	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
度数	0	0	2	6	18	29	46	44	21	23	8

満点が8名いたことは喜ばしいが、一方で3点以下が8名もいたことは嘆かわしい。選択肢が各設問につき4つであるから、ほぼでたらめに丸をつけても2.5個は正解するはずで、3点以下の8名は、ほぼなにも分かっていないことになる。よしんば不幸にして辞書・参考書等を持っていなかったとしても、英語が多少なりとも出来れば、3点以下ということはないはずである。

3. 3 設問3

与えられた日本語の意味になるように括弧の中から適当なものを選びなさい。

- A 教室についたとき先生はすでに小テストを終えていた。

The teacher ₂₁ [(a)gave (b)has given (c)had given (d)was giving] the quiz, when I ₂₂ [(a)got (b)has got (c)had got (d)was getting] to the classroom.

- B もしも原田が明日金メダルをとったら、1万やるよ。

If Harada ₂₃ [(a)wins (b)will win (c)won (d)had won] a gold tomorrow, I ₂₄ [(a)will give (b)could give (c)will have given (d)would have given] you 10,000 yen.

- C もしも原田が金メダルを取っていたら、1万儲かったのに。

If Harada ₂₅ [(a)wins (b)will win (c)won (d)had won] a gold, I ₂₆ [(a)will get (b)would get (c)will have got (d)would have got] 10,000 yen.

- D このテストがもっとやさしかったらなあ。(今難しくて苦労しているときのせりふ)。

I wish this exam ₂₇ [(a)is (b)was (c)has been (d)would be] easier.

- E 私の浮気がばれたとき、私は妻が出て行くと思った。

When my wife found out about my affair, I thought she ₂₈ [(a)leaves (b)will leave (c)would leave (d)would have left] me.

F 高木さえいなければ卒業できたのになあ。(などと将来言わなくていいように勉強しなさい。)

If Takagi ₂₉ [(a) isn't (b) wasn't (c) hasn't been (d) hadn't been] there, I ₃₀ [(a) can graduate (b) could graduate (c) could have graduated (d) may be graduated].

この設問の狙いは、英語の時制・仮定法の理解を見ることにある。口語英語の時間中にも口をすっぱくして繰り返していることだが、英語では名詞を言うたびに単数・複数、冠詞の有無、冠詞の種類(a か an か the か)の選択をせまられ、動詞を言うたびに(不定詞などの不定形を除いて)時制の選択を迫られる。この選択が意識的にできなければ、正しい英語を使いこなすことは到底できない。

- A. 21(4, 10, 85, 2); 22(74, 11, 10, 6) 過去のある時点までに何かが完了していることを表す典型的な過去完了の用法。「教室についた」のは過去のある時点のことであるから過去形を使い、その時にすでに小テストを行っていたのであるから過去完了を使う。
- B. 23(54, 16, 24, 7); 24(52, 20, 13, 15) 「もしも～だったら」という日本語にあたる英語表現が仮定法であると思い込んでいる学生が多いが、この問題のように現在の事実にも、過去の事実にも反することのない仮定においては、仮定法を使わない。従って、23の正解は a, 24の正解も a になる。23で b の will win を選んだ者は、時や条件を表す副詞節の中で未来を表す場合に助動詞の will を使わないという規則を無視している。
- C. 25(4, 3, 23, 70); 26(1, 20, 4, 76) 過去の事実に反する仮定をする典型的な仮定法過去完了の形。ともに d が正解で、比較的よくできた。
- D. 27(8, 47, 14, 30) I wish の後に現在の事実反する事柄が続く典型的仮定法過去の例。正解の b の正答率が50%未満は嘆かわしい。
- E. 28(12, 8, 50, 30) 時制の一致を受け、c の would leave が正解。かろうじて50%が正解。
- F. 29(5, 22, 16, 57); 30(2, 19, 73, 7) ここも過去の事実反する典型的仮定法過去完了の例。実際は高木がいたせいで卒業し損ねたわけだが、いなければ卒業できただろうとなるから、d の hadn't been と c の could have graduated が正解。

全体の平均は6.3点、最低は0点、最高は10点。各得点別の度数は以下の通り。

得点	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
度数	1	0	4	6	18	42	35	32	32	21	6

時制の使い分けは、辞書を見てもでてこないが、文法書と名のつくものには何らかの説明があるはずだし、この問題にでてくることは、すべて高校で学習済みのはずである。このような成績では英語を正しく話すことはおろか、書くことすらおぼつかない。

3. 4 設問4

次の各文全体の動詞がどの文型で使われているかを、1から5の数字で答えよ。ちなみに

- I Birds sing. 主語+動詞
 II I am a teacher. 主語+動詞+補語
 III I like dogs. 主語+動詞+目的語

- IV I gave him a dog. 主語＋動詞＋目的語＋目的語
V I found the book interesting. 主語＋動詞＋目的語＋補語 である。

- 31 She spoke perfect English.
32 Dinosaurs became extinct long time ago.
33 My father got me a brand new car.
34 This road leads to the station.
35 I named my daughter Minami.
36 The barber who cut my hair *did* a good job.
37 I *live* in a town situated in a valley.
38 Many languages spoken in Asia *use* Kanji borrowed from China.
39 The news that his son won the race *made* him happier than ever.
40 Dr. Takagi, who loves his students, *prepares* his lesson carefully.

動詞の意味がその使われた型に依存することは明白で、近年の学習辞書にはすべて文型(動詞型)の表示がついている。例えば He appeared suddenly out of the dark. の appear は補語をとらない第1文型で使われており、「現れる」を意味し、She appeared so happy at the news. における appear は補語をとる第2文型で、「幸せそうに見える」を意味する。知らない動詞の意味を辞書で見ると、すくなくともその動詞がどの型で使われているのかを推測出来なければ著しく不都合である。口語英語の授業中では The meat will keep for a few days in the refrigerator. と He kept the door open. という例文を与え、それぞれの意味を調べるという課題を出しているが、数多くの学生が、始めの例文の keep の意味を捜すのに、他動詞の keep の記述から順番に見始める。これは目的語を取らない自動詞であるから、他動詞の項目をいくら読み続けても出てこない。このように英語を自学自習する上にも、文型(動詞型)の知識は不可欠であり、その理解を試すのがこの設問4である。

もう一つの狙いは、関係詞やその他の修飾語句によって名詞が長くなっている場合に、与えられた文の中の本動詞を見分けられるかどうかということである。36から40までの5題においては、イタリックを付けてある動詞が、文全体の動詞である。(このイタリックは試験問題にはついていない。)

以下の各設問の解説においては、括弧の中の5つの数字が、それぞれの選択肢を選んだ学生のパーセントで、正解には下線を施してある。

31. (7, 6, 85, 1, 2) 典型的な SVO の第3文型。他の選択肢を選ぶこと自体不思議である。
32. (13, 63, 9, 3, 12) これも典型的な SVC の第2文型。正答率63%は低すぎる。
33. (1, 1, 3, 86, 10) 典型的 SVOO の第4文型。
34. (55, 13, 30, 2, 0) 第1文型。前置詞句は目的語にはならないから、第3文型にはならないし、第3文型の時には基本的に日本語で「～を～する」となることを考えても第3文型という答えにはならないはず。
35. (2, 3, 8, 17, 71) SVOC の典型的第5文型。動詞のすぐ後に名詞があるのに、第1, もしくは第2と答えた5%の学生は、自動詞と他動詞の区別もおぼつかないようである。
36. (10, 18, 62, 3, 6) did が本動詞であることを見抜けば、第3文型であることは明白のはず。
37. (55, 13, 12, 6, 14) どうも自動詞に副詞的に働く前置詞がつくと学生の頭は混乱するようである。たしかにこのように簡単な文の場合、意味さえ分かれば文型を指定できなくともよいかとも思うが。
38. (26, 11, 42, 6, 14) 「アジアで話される多くの言語が、中国から借用した漢字を使う」という意味にたど

り着ければ, use が文全体の動詞で, 第3文型であることが分かるはず。

39. (5, 7, 10, 16, 63) 「息子がレースに勝ったという知らせ」が主語であることに気が付けば, あとは make+O+C の第5文型であることがわかる。

40. (4, 5, 53, 9, 30) 誤って第5文型と答えた学生が多かった。prepare を辞書で見ても, 第5文型をとるとは書いていないはずである。副詞は補語にならないことが分かっている。

全体の平均は6.3点。この設問も0点の者から満点までいた。各得点別の度数は以下の通り。

得点	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
度数	14	13	10	18	22	30	30	28	28	13

2点未満の18名には文型の認識がまったくないと言ってよいだろう。大多数の学生は辞書に文型(動詞型)の指定があることにすら気づいていないようである。知っていればもうすこしましな点が取れるはずである。

3. 5 設問5

与えられた日本語の意味になるように括弧の中から適当なものを選びなさい。

41 彼は何千年もの歴史をもった国の出身である。

He comes from a country [(a)that (b)which (c)whose (d)of which] history goes back thousands of years.

42 平等こそかれの戦いの目標だった。

Equality was the goal [(a)which (b)for which (c)by which (d)in which] he fought.

43 我々が休暇を過ごした町は美しかった。

The town[(a)that (b)about which (c)of which (d)where] we spent our vacation was beautiful.

44 あなたに話してあげた町に是非いってみなさいよ。

You must visit the town [(a)that (b)about which (c)of which (d)where] I told you about.

45 我々が訪れた町は美しかった。

The town [(a)that (b)about which (c)of which (d)what] we visited was beautiful.

46 彼は首になったが, それは皆を驚かせた。

He was fired, [(a)what (b)which (c)that (d)it] surprised everyone.

47 レストランで私を担当したウエイターは礼儀正しかった。

The waiter [(a)who (b)which (c)whose (d)不要] served me at the restaurant was polite.

48 音楽が私の人生の目的です。

Music is [(a)what (b)which (c)that (d)whose] I am living for.

49 彼が出版した教科書はよく売れた。

The textbook [(a)who (b)of which (c)what (d)不要] he published sold well.

50 ハワイは8つの主な島からできていて, 休暇を過ごすのに人気のある場所である。

Hawaii, [(a)that (b)which (c)what (d)whose] consists of 8 principal islands, is a favorite vacation spot.

最後の問題は, 関係詞の理解を試すものである。関係詞は英語において名詞を修飾する重要な方法のひとつで, その理解無くして英語の習得は不可能である。

41. (10, 25, 48, 18) 「その国の歴史が何前年もさかのぼる」という関係に気が付けば当然 c の whose が選べるはずである。正答率50%未満。
42. (23, 56, 7, 14) fight for the goal で「目的のために戦う」となるのだから, for which が正解。
43. (6, 2, 8, 84) その町で休暇を過ごしたわけだから, 関係副詞の where が正解。
44. (52, 8, 9, 31) 同じ town を修飾するのでも, I told you about the town. と about の目的語にあたる場合は, the town that I told you about となる。d の where を選んだものが31%もいたが, 関係副詞と関係代名詞の基本的違いがわかっていない。
45. (58, 4, 21, 17) We visited the town. とは言えても, We visited of the town. と言えないことは visit を辞書で見れば明らかである。ごく単純な目的格の that を使えばよいものを, なんと21%が c の of which を選んでいる。
46. (22, 42, 22, 14) 前の文の内容をうける非制限用法の which は会話でも多く使われる大切な語法である。what や that にこのような用法はない。
47. (69, 3, 2, 25) 人を先行詞にした主格の関係代名詞 who を正しく選べた者は僅か69%だった。なんと3割の学生が, この中学で教わる関係代名詞を使いこなせないわけである。また25%もの学生が(4人に1人!), 主格の関係詞を省略できると答えている。the man who loves Mary が「メアリーを愛している男」という名詞であり, who のない The man loves Mary. が「その男はメアリーを愛している」という文になることが直感的にわからなくては, とても英語など使いこなせない。
48. (58, 18, 21, 3) 典型的な what の用法であるのに, 正答率は60%に満たない。先行詞を持たずにそれ自体で名詞節を作れるのは what だけである。
49. (1, 22, 14, 64) 目的格の関係詞が省略可能であることに気が付き d を選べたのはたったの64%であった。これも中学英語の問題で, 基礎的な知識の欠如は明白である。
50. (25, 61, 9, 5) 先行詞を限定せず説明する形の非制限用法は that にはない。したがって which が正解である。

全体の平均は5.7点, ここでも0点から満点まで得点は大きくばらついている。各得点別の度数は以下の通り。

得点	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
度数	5	1	21	15	19	19	40	29	20	15	13

0点がこれまでの問題より多いのは, 時間が足りなくなった者がいたせいである。それにしても3点以下の者が合わせて42名もいるのには驚いた。関係詞の基礎的知識の欠如は明白である。

4. 総合分析

総受験者197名の50点満点の平均点は28.6点で, 正答率は6割以下だった。最低点は期待値を下回る10点が1名(この者は設問4及び5を解答していない), 最高点は43点で, 6名いた。全体の度数分布は以下の通りで, 10-13は10点以上13点未満を表している。

10-13	13-16	16-19	19-22	22-25	25-28	28-31	31-34	34-37	37-40	40-43	43-46
1	0	7	14	17	21	35	32	28	24	12	6

繰り返して言うが、辞書・参考書など何を参考にしても構わないという試験で、この成績である。8割以上正解したのは197名中18名と全受験者の約1割、これに対して5割未満の学生は39名、約2割であった。多少色をつけて37点以上を基礎はなんとかなる者と考えてもこれが約2割、逆に中学英語からやり直したほうがよさそうな者が2割、残る6割がその間をしめているという現状である。この2-6-2の比率は、英語以外の教官の学生の出来具合に対する直感とも一致するのではなかろうか。語学はまるでだめだが物理は天才的にできるアインシュタインのような人間がそれほど多く存在するとは思えない。

最後の2割に属するであろう学生のエピソードをいくつか披露しよう。cutの活用をcut, cat, cutten(cuttedはまだかわいい方である)と答える者、文脈から明らかに「行進」の意味のMarch(固有名詞なので大文字で始まっていた)を「3月」とやるならまだしも「5月」と答える者、Can I have my shirt cleaned by tomorrow?の代わりにCan I have my shit cleanned by tomorrow?とshirtのrをcleanに付けてしまう者(これが1クラスに2人いた)、denyの3単現のdeniesを「デニーズ」と読み、そのまま辞書で引いて「ありません」と宣言する者、富士山をMt. Hujeと綴る者、You are~と始まるbe動詞の文を否定文にしてみろといったら、You don't are~と答える者、democracyを「デモ」と訳す者、まさに百花繚乱である。

次に推薦入学者の成績を、他の学生のそれと比べてみたい。平成9年度の「入学者選抜方法研究委員会報告書」にもあったように、推薦入学の学生の成績はよくできる者とまるでできない者にと別れるようだが、今回のクラス分け試験においても同様の傾向が見られた。先ほどの全受験者のヒストグラムと同じ区間を用いて、推薦入学者のうちクラス分け試験を受けた29名の成績の分布を示すと、以下のようになる

10-13	13-16	16-19	19-22	22-25	25-28	28-31	31-34	34-37	37-40	40-43	43-46
1	0	5	2	4	4	7	0	3	2	0	1

この29名の平均点は24.2点と全体の平均より低く、推薦入学者以外の平均点は29.4点で、約5点の差が見られた。受験者全体のヒストグラムと推薦入学者のそれを比べると、最下位の1名と16点以上19点未満の7名のうち、5名までが推薦入学者によってしめられていることがわかる。これでは何を基準に推薦されたのかまるでわからない。入学後成績があまりよくない学生を推薦してきた学校からは2度と推薦を受け付けようとするべきである。

最後に課程別の平均点だが、以下に見られる通り、たいした差はなかった。

課程	Mn	Me	I	EL
人数	48	48	46	55
平均	29.9	28.5	27.3	28.8

5. 入試及び英語カリキュラム改革案

以上の結果を見ても明らかな通り、問題はこれほど大きなばらつきを持った学生をどう指導して行くかの一点に尽きる。トップ2割の学生は叩けば何とかものになる。熱心な学生の中にはTOEICを受け、理科系の企業が一応の目安とする550点を突破する者もいる。なんとか最良の学習機会を提供したい。真ん中の6割を、英語で勝負できるようにするのは苦しいが、少なくとも恥をさらさない程度の英語力は付けて卒業させたい。問題は残った2割で、彼らにはかなりの手がかかる。かといってこれをフリーパスで卒業させていたのでは本学の信用にかかわる。そのあまりの英語力の無さに人々があきれることは必至だからである。そしてこの中学英語すら満足にできない学生の割合はこれから増えこそすれ決して減らないであろう。進学を希望する学生が全て大学に入

学できる時代が来れば、今の2割が、3割、4割は当たり前という事態になることは目に見えている。まずはこの英語が不得意な学生に、入試システムの点からどう対処するべきかを考えてみたい。

5. 1 入試システム改革案

本学の二次試験に英語がないことが、入学者の英語力を下げている一因であることは否定できないだろう。英語が二次にない都内の国立大学ということで、本学を選ぶ学生も多いようである。英語の試験を二次試験に課してはどうかという意見が学内で聞かれるのももっともである。つまり英語が出来ない学生には、はなから門前払いを食わせるわけである。しかし一方で、英語を試験に加えた場合、志願者が激減、ひいては定員割れを起こすのではないかという危惧の声もある。また試験科目を増やすことは世の趨勢に逆らうものであり、文部省とのからみからも難しいのではという意見もあるようである。どの意見ももっともだが、ここで私が提案したいのは、今回のクラス分け試験のように(もっと簡単でも構わない)辞書・参考書等何を持ち込んでもよい試験とし、出題の傾向を事前に受験者に知らせ勉強させておくという方法である。cut-cat-cuttenなどと間抜けな活用をしないよう、不規則動詞活用変化をあらかじめ暗記してこいと発表し、実際に試験して出来ない者は落とす(もちろんこの時は辞書・参考書は使えない)。仮定法や関係詞の使い方も、問題に出すと宣言し、例題を発表してしまう。こうすればいくら英語が不得意な者でも、勉強すればなんとかなると思わないだろうか。またこのような方式なら、受験者の負担を著しく増すことにもならず、文部省もそれほどいやな顔をしないのではあるまいか。入学時にこんな試験をしている大学は世間のどこを捜してもないだろうが、誰もやっていないことこそ価値があるという考えもあると思う。どうか大学として検討してもらいたい。と書いておいたところ、6月31日に発表された大学審議会の「21世紀の大学像と今後の改革方策について ―競争的環境の中で個性が輝く大学― 中間まとめ」第三章、「学部教育と高等学校教育との関係」というセクションにこうあるのを発見した。

「各大学等においては、高等学校のカリキュラムの動向や学生の実態を踏まえ、入学前に学生が学習しておくべき内容に関する積極的な情報提供に努め、入学者選抜の段階において、当該大学あるいは学部・学科の授業を受けるために必要な高等学校の科目について、入学試験を課す、あるいは、高等学校での履修を求めるなどの措置をとることが考えられるほか、入学後は、必要に応じ、学生の履修歴等に対応して大学教育の基礎を教えるなど、学生に対するきめ細かな配慮や様々な工夫が必要である。これらの取組を通じて、学生が後期中等教育から高等教育へ円滑に移行することができるようにすることが求められる。」

大学審議会の答申に文部省が従うとすれば、上記の筆者の提案が反対されることはなさそうである。ここは一番「積極的な情報提供に努め」本学の「授業を受けるために必要な高等学校の科目」=英語について、「入学試験を課す」措置をとってはどうかだろうか。どうかこの提案を検討していただきたい。

またどうしても入試に英語を加えることができないのなら、合格し入学手続きを済ませた学生に学習の課題を郵送し、入学時にクラス分けのテストを行なうので勉強してくるよう強制してはどうかだろうか。入試に出す程度の学習効果はおそらく望めないだろうが、少なくともやる気があり優秀な学生を選び出すことは可能であろう。

5. 2 英語カリキュラム改革案

入試改革はしかるべき所での検討にまかせるとして、今度はどのようなカリキュラムにすれば最大多数の最大幸福がかなえられるかについて検討したい。今回のクラス分け試験の結果から明らかな通り、これだけ実力に差がある集団に、同じカリキュラムを与えても、大きな効果は期待できない。英語が不得意な者は授業について行けず欠席するか、出席して惰眠をむさぼる。反対に英語に多少なりとも自身のある者は、過信してなまける。対

応策として、講読英語では英語を不得意とする者を集めた授業をしているが、前期と後期で教官も代わり、指導内容に今一つ統一性がないようである。現在1年次の英語の必修科目は、口語英語前・後期(一方は外国人講師、もう一方は筆者)、講読英語前・後期合計4単位である。この中でもっとも早急に改めなくてはならないと筆者が痛感しているのは、外国人教師による口語英語である。これだけ力の差がある学生を50名単位でネイティブ・スピーカーが教えても学習効果はほとんど無い。能力別のクラス編成にするには複数の非常勤講師をやとう費用がかかる。そこでネイティブ・スピーカーによる授業は、2, 3年次にまわし、1年次では口語英語をともに専任の日本人教官が担当し、基礎を固めることに重点を置いてはどうだろうか。

またこれだけ実力差のある学生に同じ科目に合格しなければ卒業を認めないとするには、もはや無理があると思われる。中学英語すらままならぬ下の2割の学生は、これが出来るようになれば卒業させてやってはどうか。例えば「基礎英語」という科目を作り、前期・後期をたっぷり利用して、中学英語の基礎を復習させる。毎時間宿題を出し、これを教官が添削し、目標を明確に示して最終試験に合格すれば単位を認定する。同様のやり方で真ん中の6割には「中級英語」、トップの2割には「上級英語」を用意する。これまでのように同じ「講読英語」として能力別クラスにし、単位の上限を設けるという方法と異なり(英語が不得意な者のクラスに属した場合優はつかなかった)、どの授業でも自由に成績が付けられるのも利点である。以上3つの科目を現在の講読英語の代わりに4名の教官が担当する。卒業に必要なのは以上3つの科目から選択1科目前後期合計2単位とするわけである。さらに学生が簡単な基礎英語にばかり走らないように、例えば就職の際の学校推薦には最低でも「中級英語」に合格していることを条件とし、さらに他の条件が同じなら「上級英語」合格者を優先するといったルールを決めておくことも考えられる。

授業の内容だが、この際、就職にも役立つTOEICや英検等のテキストを利用することを考えてはどうだろうか。(私個人としてはTOEICの方が実用的で、本学の学生には合っているように思うが、基礎英語の受講者には難しいので、英検3級程度のテキストを使うことも考えられる。また中級英語には英検2級、上級英語には英検準1級のテキストという方法も可能である。)後述する英文法基礎及び英語リスニングとの兼ね合いで、前期には主に、文法・語彙を中心に、後期にはリーディングを中心に行なうことが望ましい。以上のような資格試験向けの自習用の参考書をテキストとして指定し、毎回決まったセクションを自習させ、その類題を授業中にやらせ、暗記すべき単語・表現等を指定する。学生の自習を促すために毎回小テストを行い、例えば3度続けて合格点に満たない学生はその時点で不可とすることも可能である(筆者の口語英語ではこれを「仏の顔も3度ルール」と呼んでいる)。最終試験は、すでに学習した問題からのみ出題し、合格点に達した者に単位を認定する。毎年同じテキストを使い、1度不可になった学生も、試験を受けて合格すれば単位を認定するようにしておく。言ってみれば検定試験のようなもので、たとえ1年次に不可になっても取り返しがきくし、より上級のレベルに挑戦したければ、いくらでも可能である。

いずれにせよ到達目標を明確に示して、一定の合格水準を維持し、これを下回る者には断固として単位を認定しないという厳しい態度が必要である。この方針もまた大学審議会の答申にそうもので、前出の中間報告の同じ章にはこうある。

「大学の社会的責任として、卒業生の質を確保するという観点から、教員は、あらかじめ学生に対して、各授業における学習目標や目標達成のための授業の方法及び計画とともに、成績評価基準を明示した上で、厳格な成績評価を実施するべきである。」

現在筆者が教えている口語英語は日常会話に役立つ重要表現を学習しながら、高校程度の英文法の基礎を復習させるもので、実質的には英文法基礎とでも呼ぶべきものであるから、名前も是非あらためて、「英文法基礎」

としたい。この授業では英和辞典の使い方にも触れ、英語学習の基礎固めをねらっている。(現在日本で作られている英和辞典は世界の二ヶ国語辞書のなかで最高水準にあるとよく、動詞型・名詞の可算・不可算等英語を読んだり書いたりする上で非常に役に立つ情報が盛り込まれているが、残念ながら使用者の多くがこれを賢明に利用できていない。)この科目は、各課程別に行なっており、現在 Mn 及び I の学生は後期に授業を受けているが、出来れば筆者 1 人ではなく 2 名の教官が担当し、1 年次の前期に全学生が受講できるようにしたい。(これは現在の外国人講師による口語英語を常勤の教官が担当することで可能になり、さらに同一時間帯に 2 名の教官が教えるわけで、能力別に 2 クラスをもうけることが可能になる。)こうすることで前期に英語学習の基礎固めを目指すわけである。同時に、この段階で他の授業との横の連携を図り、できるだけ有機的なカリキュラムの展開を可能にするべきである。例えば名詞の可算・不可算と冠詞の用法を説明した後の週では、これに関わる TOEIC もしくは英検の問題を「中級英語」や「上級英語」でも取り上げるといった具合である。

これで最後に残るのは後期の口語英語であるが、ここでは授業名を「英語リスニング」とでも改めて、耳を慣らす訓練を徹底的に行なってはどうか。ここでも TOEIC や英検のリスニングの問題を中心に、聞き取りの訓練を行えば、文法・リーディングには「英文法基礎」及び「中級・上級英語」で対処し、リスニングにはこの 1 年次後期の授業で対処するという体制が出来上がる。以上の基礎力を踏まえた上で、2 年次には 1 年次の成績に基づいた能力別小人数クラス(上限 20 名程度)の外国人講師の授業を用意し、会話力をつけたい学生のニーズに答えるようにする。さらに複数の資格試験向けの授業を用意し、2 年次の終わりに TOEIC の受験を勧め、その結果に基づいて 3 年次での勉強方法を指導し、3 年次の終わりまでに是非とも TOEIC 550 点を突破する学生を一人でも増やしてやりたいというのが筆者の考えである。

以上のカリキュラム改革案をまとめれば以下になる。現行の講読英語(I, II)に代わり能力別の基礎・中級・上級英語(I は文法・語彙中心, II はリーディング中心)を設け、何らかのクラス分け試験の結果に基づいて、2 課程の学生を、基礎英語 1 クラス 20 名、中級 2 クラス各 30 名、上級 1 クラス 20 名を目安に割振る。現行の口語英語(I, II)は、英文法基礎と英語リスニングに分け、2 名の常勤講師がこれを担当、前期に英文法基礎、後期に英語リスニングを開講し、能力別の 2 クラス編成とする。各授業間の横の連絡を綿密にし、全体として有効に機能する有機的なカリキュラムを目指す。ネイティブスピーカーによる会話の授業は 2, 3 年次に回し、1 年次の成績に基づいた能力別の小人数制で行なう。

読者の中には、これでは 1 年次の英語がまるで資格試験の準備のようで、基礎教養科目としていかなものかという意見を持たれる方もいると思う。しかし社会一般のニーズが「役に立つ英語」である以上、これに答えることは文部教官として当然の義務ではなかろうか。どのようなテキストを使ったところで、英語の基礎を教えることに変わりはない。学生たちの利益となる資格試験の準備もできるなら、一石二鳥と言うものである。また大学院への進学を希望する者には、科学英語講読や、技術英語論といった授業も開講されており、1 年次に培った基礎の上に、英語を使って学問する実力をつける機会も提供されている。決して実用主義一辺倒ということではないと考える。

6. 結語

以上に述べたことは、あくまでも私見であり、決して本学英語教官の合意を経た提案ではない。他の英語教官の中からは、能力別クラス編成が学生の学習意欲に悪影響を及ぼすのではないかという危惧の声や、TOEIC・英検などの資格試験対策を授業に取り入れることに反対する声もあった。また単位の認定を厳しくすることに関しても、全学的な合意のもとに行なわれる必要があるという意見も出された。

就職試験にはどの企業でも決まって英語を課す昨今、4 年次の英語力は本学学生に対する社会の評価の重要な部分を占め、就職時の英語試験に関する耳の痛い話もいくつか聞いた。「学校推薦をもらって就職できなかった

学生がなぜ不採用になったかを企業の就職担当に尋ねたところ、その学生の英語の就職試験の答案をつきつけられ、あまりに簡単な問題が出来ていなかったのも、二の句がつけなかった。」「東京商船大学の学生は神戸商船大学の学生に比べて英語が出来ないから取らないと言われた」など、本学で英語を教える身としては、心中穏やかではない。クラス分け試験の結果をみても分かるように、確かに底抜けにできない者もいるので、すべてを英語教官のせいにされても困るが(中にはどうあがいてもものにならない学生がいる)、しかし現状維持では何も変わらないどころか、事態は悪化するおそれがある。入試の問題や、単位の認定の基準など、全学的合意を必要とすることもあり、紀要の場を借りての発表を考えた次第である。私の提案に対する意見や、本学での英語教育に対する要望などがあれば、どうかお聞かせ願いたい。(takagi@ipc.tosho-u.ac.jp)